

文窓

ふみのまど・fumi no mado

神戸大学文学部 同窓会 文窓会

事務局：〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

TEL&FAX 078-806-7207（水曜日11時～16時）

<https://www.bunsokai.com/>

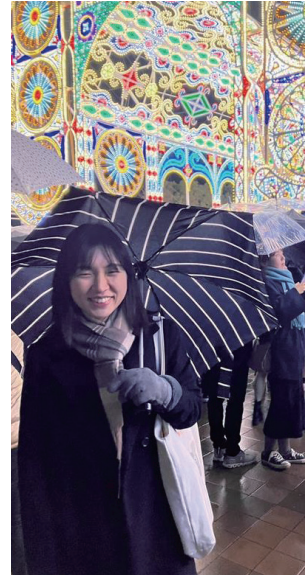
連絡用メール：bunsokai@gmail.com

文学部：総務係 TEL 078-803-5591 FAX 078-803-5589

教務学生係 TEL 078-803-5595

<http://www.lit.kobe-u.ac.jp>

23号
2025.9.30



文窓会ホームページの URL

<https://www.bunsokai.com>

スマートフォンでも文窓会ホームページへ！右の QR コードを
読み取り、画面に出る指示に沿って操作するだけ。

スマートフォンはこちら▶▶▶



特集／私の現在地

新入生・卒業生アンケート p12-13

神戸オックスフォード日本学プログラム(KOJSP)

第12期生 修了発表会報告 p14





文学部・人文学研究科 からの学生の海外派遣

人文学研究科長・文学部長
白鳥 義彦

国立大学法人には教育・研究に関する評価指標が設けられていますが、その一つに海外派遣学生数があります。文学部・人文学研究科からは、コロナ禍の間は派遣が止まっていましたが、2023年5月に新型コロナウイルス感染症の感染症法上の取り扱いが2類相当から5類に移行した後、2023年度は31名、2024年度は43名の学生・院生を海外に派遣しており、派遣人数は着実に回復してきています。

海外派遣には、半年あるいは一年の海外協定校への交換留学や、オックスフォード夏季プログラム等が先ずありますが、国際シンポジウム等への派遣もあります。ここでは、人文学推進インスティテュートによる派遣を順不同で紹介したいと思います。

一つは神戸・北京・復旦三大学人文フォーラムです。これは、30年以上にわたって北京大学および復旦大学から交互に中国語の教員を派遣いただいてきている関係性を土台に、三大学が毎年持ち回りでフォーラムを開催しているものです。昨年度は復旦大学で開催され、今年度は北京大学で開催の予定です。教員とともに、大学院生が約5名程度参加しています。

次に、パリ大学ナンテール校との教育研究交流があ

ります。パリ・ナンテール大学にて哲学・美学芸術学を中心テーマとして、大学院生による国際学生シンポジウムを毎年開催しています。こちらにも、教員とともに、大学院生が約3名程度参加しています。

またINTERFACEingという国際交流もあります。これは、国立台湾大学、トリア大学と連携し、国内外の人文系ヨーロッパ研究者のネットワーキングを目的とする国際会議です。参加者は、開催後に国立台湾大学が発行する電子ジャーナル *Interface: Journal of European Languages and Literatures* の特集号に投稿し、研究成果を広く世界に発信することができます。今年度はトルコ・ドグシュ大学で開催される予定で、教員とともに約4名程度の大学院生が参加しています。

さらに、日本語日本文化教育インターンシップによる派遣もあります。これまで、オックスフォード大学、ディミトリエ・カンテミル大学（ルーマニア）、トリア大学、ハンブルク大学、北京外国語大学に、数週間から数か月にわたって、毎年約2名から5名程度大学院生を派遣し、日本語および日本文化の教育を実地で体験してきています。

文窓会の皆様には、日々の教育研究を行うなかで、日頃からご支援を賜り、大変感謝しております。これからも温かいご支援やご協力をいただけますよう、心よりお願い申し上げます。



平和を希求し続けた 「戦後80年」の変化

文窓会会長
武藤 美也子

今夏も去年以上に暑い日が続いております。気温だけでなく物価の高騰で、家計も大変な中いつもに変わらぬ温かいご支援をいただき感謝しております。

第2次世界大戦から80年。日本は平和憲法を掲げ戦争に加担しないということで80年を歩んできました。それもだんだんと曖昧なものになってきている気がします。

今年4月30日付で藤澤正人学長が各部局の幹部宛てに通知を出しました。通知には「安全保障技術研究推進制度への応募を一律に禁止するという本学の方針を見直す」と記されていました。

「安全保障技術研究推進制度」とは、兵器など防衛装備品の開発につながりそうな研究を公募するというもので、2015年に発表されました。日本を取り巻く安全保障環境が厳しさを増す中で、国民の命と平和な暮らしを守るためには防衛にも応用可能な先進的な民生技術を積極的に活用することが重要であるとし、政府がそのような研究に資金を出すというものです。

それに対し神戸大学は、2017年の学長通知で「大学から生まれる研究成果等は、軍事目的ではなく平和利用されるべき」として制度への応募自粛の方針を示していたのです。

それが今回方針見直しということで解禁されたのです。

私は1968年の卒業で、在学中は産学協同（産学連携）は研究の自由を束縛するということで、排除されました。しかし2004年の国立大学法人化以後研究費の捻出にどの大学も苦勞しております。今や産学官連携で研究費を捻出しなければ研究が続いていけないのです。

それは理解できるのですが、この世界のあちこちで力尽くの紛争が起こっている時に、学内での審査はあるとしても、神戸大学の研究を、軍事目的で利用できる「安全保障技術研究推進制度」へ応募しても良いという通知は納得できるものではありません。

そんな中、神戸大学平和フォーラムは《緊急講演会「学術会議の問題と、大学での軍事研究のあり方を考える」》を5月23日に開催しました。<https://www.asahi.com/articles/AST5R4FCLT5RPIHB005M.html?mssockid=35c75b9a20ca6c1f1dab546421046dc8>

このような情勢の中、後輩たちが自由に研究し、自分たちの力を発揮できるように、我々同窓生はどのような応援ができるのか、皆さんと共に注視して考えていきたいと思います。

最後に嬉しいニュースを一つ。22号では文窓役員高齢化で困っているとお伝えしました。そういう中去年の12月に待望の若手役員が加わってくれました。2009年修士卒業の成田千紘さんです。今号に執筆してもらっています。新しい役員の登場をみんなで喜んで応援していきたいと思います。

2025年6月記

神戸大学文学部生の人間力・文学力・未来を応援する

第19回 文窓賞 2025年

学生レポートコンクール結果発表

今年の応募は12作品。いろんな専修の学生の応募がありました。7月28日の審査委員会にて、下記の通り受賞作品（優秀賞1作品、佳作3作品、新人賞2作品）が決定されました。

優秀賞(表彰状と賞金5万円)

「逆張りの終着点」 有川 悠真(社会学 4回生)

人生の岐路では周囲とは迎合しない頑なな筆者。但し、一度目標を定めると達成するため企画力と行動力を発揮する。社会に出ると、まだまだ“No”と言えない日本人が多いような気がする。いい意味での逆張りが試されるのはこれからだ。卒業後が本番、大いに力を発揮してほしい。

佳 作(表彰状と賞金2万円)

「2025年1月17日の日記」 熊谷 孝太(社会学 2回生)

東日本大震災を5歳で経験した筆者は、今、阪神淡路大震災の取材を通して悩み、考える。気負わない姿勢に、筆者の柔らかい感性が感じられる。プラスにもマイナスにも大きな力を持つメディア、そのあり方は、災害時の取材・報道に限らず重要な問題点だと思われる。

佳 作(表彰状と賞金2万円)

「記憶の歩き方」 村上 陽向(社会動態 M1)

筆者は谷川俊太郎の詩と、村上春樹の紀行文を手し、そこに書かれた街を歩きながら想像を巡らす。自分が暮らす神戸の街も、その一部を忘れてしまうと、その「神戸」は存在しなくなるのではと考え、「記憶を歩き、記すこと」にトライした。面白い発想だ。文末の我が町の記述は、地図や情景が浮かび上がってくる。

佳 作(表彰状と賞金2万円)

「『ガクチカ』をこえて」 末廣 晃(地理学 3回生)

今の大学生は、履歴書の中での自己の商品価値を上げるため、大学での経験を取捨選択し、狭めているのではと筆者は論じる。求められる人材は、ビジネス拡大や新たな技術獲得に邁進、貢献できる人間。効率性や功利性を求めひた走るその社会は、本当に人々が求めるものなのか？「ガクチカ」をこえて問い続けてほしい。

新人賞(表彰状と賞金1万円)

「ごっこ遊び」 日下部 友基(1回生)

新人賞(表彰状と賞金1万円)

「私と言葉と人と」 筒井 はな(1回生)

選考を終えて

今回も、人文学を学ぶ意味や葛藤、文学部の存在意義につき深く、しっかり考えた作品が占めていました。今回は、文学部生らしい「自由な発想」や「心の遊び」を感じさせてくれるユニークな作品にも出会いたい。

(文責 審査委員長 西川京子)

選考委員

白鳥義彦 研究科長(社会学 教授)

中畑寛之 副研究科長(フランス文学 教授)

佐藤昇 副研究科長(西洋史学 教授)

武藤美也子 吉田浩次 廣野幸夫 三宅征彦 中川伸子 市澤哲 津田薫 梅村麦生 成田千紘 西川京子
(計13名)

走るトラックは自分で選びたい

河内 麻実(カワチアサミ)

(フランス文学専修・2016年卒)

2016年卒、フランス文学専修の河内麻実と申します(留学していたので一年ずれており、本来は2015年卒)。今回は「わたしの現在地」がテーマということなので、最近の自分に起こった出来事と、それについて考えているあれこれをお話ししたいと思います。よろしければお付き合いください。

二回の転職を経て(映画配給会社→翻訳会社→)、私は今メーカーで人事労務をしています。といっても三ヶ月ほど前から産育休に入っており、最近はこれから子育てと仕事を両立できるのかなと考えたりしています。幸い今の職場では妊娠出産を理由に退職する社員はおらず、そういう意味では「両立できる」と、とりあえずは言えるかもしれません。でも、辞めずに済んだらそれだけで両立してるってことになるんでしょうか。ふと、私はいつの間にか「マミートラック」に乗ってしまったのではないかと考えてしまいました。

そもそも、バリバリ働きたい、管理職のような責任ある立場になりたいとは思っているのか。今の職場だと管理職を任されている人(ほとんどが男性)は毎日遅くまで働いていて、出張も多い。責任ある立場に就くことの条件が長時間労働のようにになっているのならば、しばらく時短勤務にしないといけない私にとっては、目指しにくいし、目標にもできなさそうです。そして子供の有無に関わらず、そのような働き方ができないから責任ある立場になりたくない、なれないという人は周りにも結構いるなど感じています。(この状況を読み誤って、「最近の若手/子育て中の女性は管理職になりたがらない、やる気がない」「あの人は最近子供ができたから昇進は望んでいないだろう」と考えてしまっている会社も多いのかもしれませんが。)既存の「男性」の働き方が変わらなければ、私のような状況の人は管理職になりたいと考えることすら難しそうです。

そんな私も、自分が当事者になるまで見ていなかったなあと気づくことが多々あります。例を一つ。

同じ部署にお子さんがまだ小さい男性がいま

して、どんな時でも19時までには一旦退勤します。理由は、「子供をお風呂に入れないといけないから」。これを聞いて私は「そうなんだなあ」くらいの感想しか持っていなかったですし、繁忙期は「たまにはいいんじゃない」なんて思ってしまった時もありました。でもいざ自分が朝から晩まで乳幼児と二人きりの生活に飛び込んでみると、お風呂に入れてもらえるかどうかは想像以上に重要でした。夫が帰宅し浴室に子連れで行って引き継ぎが済んだ時の安堵感。子が寝た後に一人でゆっくり風呂に入る時間。これらがあるかないかで一日の疲労感が全く違います。前述の私の同僚は、きっと現時点で管理職を目指そうなんて夢にも思わないでしょう。また、私も夫に「今度役職がつくから帰宅は毎日21時を過ぎるかも」なんて言われたら素直に祝福できる自信はありません。

子育てだけでなく、介護を理由に働き方を変えざるを得ない人も増えてきていますから、仕事とプライベートの両立に悩む当事者は増え続けるはず。学校に行きたいから週休三日にしたいなんて人もいるでしょう。人生のあれこれ乗り越えていくためにその都度働き方を変えることができ、かつ活躍し続けることができる環境が理想ではないでしょうか。誰かが働きやすい会社は、皆にとって働きやすいはず。思いつくままに書いてしまいましたが、やや強引にまとめると、子持ち子なし既婚未婚とか区分を作って勝手に当てはめるのではなく、一人一人の働き方を尊重しつつ、成果を出せる会社にすることを、復帰後の目標としたいと考えているというお話でした。

追伸、2015年卒の皆様。卒業十周年記念イベントを開催したいという話があるのでぜひ実現させましょう。



大学院進学とその後

陣野原 匠(東洋史学専修・2024卒)

私はこのたび、神戸大学文学部東洋史学専修を卒業し、他大学の大学院へ進学いたしました。進学先として神戸大学ではなく他大学を選択した理由は、当該大学において私の研究分野に関する学術的蓄積が豊富であり、また関連する文献・資料が数多く所蔵されているという点に大きな魅力を感じたためです。

他大学での生活が始まってからというもの、神戸大学の良さを再認識する機会が幾度となくありました。第一に挙げられるのは、やはりその美しい景観です。確かに、キャンパスが山の上に位置していたため、通学は容易ではありませんでした。しかし、文学部棟から見下ろす景色は、今振り返っても格別であり、心に残る風景でした。現在は平地にある大学に通っており、坂を登らずに済む日々のありがたさを感じる一方で、神戸大学の眺望の素晴らしさは今なお懐かしく思い出されます。

第二に、神戸大学の教育・学修支援体制の手厚さにも改めて感謝の念を抱いています。たとえば、困りごとがあれば教務課へ相談に行けば丁寧に対応していただけましたし、図書館で借用した図書はキャンパス内どの図書館にも返却可能であったことなど、細部に至るまで学生の便宜が図られていました。入学時のガイダンスにおいても、必要な情報が明確かつ体系的に提供され、4年間を通じて大きな支障なく学業に集中できたのは、今思えば非常にありがたい環境であったと実感しております。

次に、人文学系、特に歴史学を専攻する大学院生の実態について少し述べたいと思います。端的に言えば、修士課程1年目は学部3回生と4回生の学業を同時にこなしているような忙しさです。私は進学してわずか1か月で、「進学すべきでなかったのではないか」と感じるようになりました。より高度な研究を志して大学院への進学を決意したものの、実際には語学の予習と復習に追われる日々で、休日らしい休日はほとんどありませんでした。

加えて、私が在籍する研究室には、私を除いて修士課程の学生が不在であり、唯一の博士課程在籍者も早々に留学されたため、事実上、大学院生は私一人という状況に置かれることとなりました。幸いにも、神戸大学から同じ大学院へ進学された先輩がいらっしゃり、その方の助力を得ながら何とか日々を乗り越えています。修士2年次についてはまだ経験していないため詳述できませんが、先生方によれば、修士論文の執筆期間が最も過酷であるとのこと。現時点では、来年度のことを見通す

余裕もなく、ただ来春に無事桜を見られることを願っております。

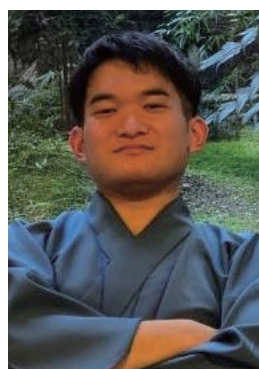
私自身の研究テーマについても簡潔にご紹介いたします。私は近世西アジア地域の外交関係史を主たる対象としており、主にペルシア語文献を用いて研究を進めています。ただし、対象とする

のが複数の王朝間における外交関係であるため、状況に応じてオスマン語などの言語も参照する必要があります。研究手法としては、対象とする時代に記されたあらゆる歴史書に目を通し、それらの記述を基に当時の国際関係の構造を復元することを目指しています。

近世西アジアという地域や時代は、多くの日本人にとって馴染みが薄いかもしれません。そのため、「そのような時代の外交を研究して何の意味があるのか」と問われることもあるでしょう。しかしながら、当時に形成された国境線や政治的枠組みは、現在の中東地域の国際情勢にも少なからず影響を及ぼしており、現代の国際関係を深く理解するためには、歴史的背景を丹念に読み解くことが不可欠であると私は考えております。

最後に、将来に対する私自身の考えについて触れておきたいと思います。率直に申し上げれば、私は自らの将来について明確な展望を持っておりません。漠然と博士課程へ進学し、留学を経て博士論文を執筆するという進路を思い描くこともありますが、その道を唯一の選択肢としてよいものかという迷いも常に抱えています。他方で、教員免許や学芸員資格は取得しておらず、就職活動にも取り組んでいない状況です。「将来についてもっと真剣に考えるべきだ」と指摘されれば、確かにその通りかもしれません。しかしながら、もし本当に将来を現実的に見据えていたのなら、大学院への進学は選ばず、学部卒業後に就職していたのではないかと思う自分もいます。現在の世の中では、初任給が月30万円に達するという話も聞かれます。そのような中、私は年間50万円以上の学費を支払いながら学びを続けている状況にあります。今さら焦っても劇的な変化があるわけではなく、「まあ、死ぬことはないだろう」と、ある種の達観に近い心持ちで日々を過ごしております。

以上、まとまりのない文章となってしまいましたが、文学部から大学院に進学する者がどのような環境で、どのような思いを抱きながら研究生生活を送っているか、少しでもご理解いただけましたら幸いです。



修了から15年後の私

成田 千紘(言語学専修・2010年卒)

2010年に修士課程を修了してからずっと神戸市灘区内に住んではいたものの、15年近く文学部に足を踏み入れていなかった卒業生が、文窓会の一員となりました。約15年ぶりに訪れた文学部でご縁があり、あれよあれよという間に文窓会に入っていたことに自分自身が一番驚いています。

学生時代「何学部？」と聞かれ「文学部」と答えると、「じゃあ、本をたくさん読んでいるんですね!」といったことを高確率で返されるのが嫌でした。部活動とアルバイトにかまけて、単位を取るためになんとか授業には出席している、という状態の自分に後ろめたさを感じていたからだと思います。小さいころからスポーツが好きでしたが、通っていた高校は大学進学が最優先で部活動ができず、その反動もあってか大学4年間はスポーツ最優先の4年間となりました。

ご存知ない方が多いと思いますが、私が所属していた神戸大学女子タッチフットボール部は2024年に創部30年を迎え、何度も日本一になっている神戸大学の体育会の中でも実績のあるチームです。「タッチフットボールって何？」という方はぜひ検索して調べていただきたいのですが、一言で言うと「タックルのかわりにタッチをするアメリカンフットボール」といったところです。新歓祭で勧誘され「面白そう!」とノリと勢いで入部したら、思いのほか練習がハードな体育会系のチームでした。授業が終わるとすぐにグラウンドに向かわなければいけないので、基本的に文学部での授業も LANSBOX での昼食もジャージ姿だったような気がします。陽に焼けて真っ黒だったし、チームカラーの赤のジャンパーを着ていたのとんでもなく浮いていたと思います。

思い返せば文学部に入ったのも、言語学を専攻したのも、「面白そう!」という直感でした。その時その時興味を持って「やりたい」と思ったことを選んで今に至ったという感じです。英語の教員になるか就職するか、どうしようかグダグダしていたときに日本語教育に興味を持ち大学院に入りなおしたのも直感だったと思います。

今現在の私は、日本語教師として日本語学校や専門学校で日本語を教えたり、日本語サロンを運営する NPO 法人で活動しています。私が活動する日本語サロンには、神戸界限に住む在留外国人や留学生が日本語を学び



にやってくる。日本で働いている方はもちろん、その配偶者もたくさん在籍しています。子供がいるママさんたちも多く、私も娘が3人いるので日本語を教える先生というよりは、同じママ友のような気持ちで学習者と接しています。

先日、台湾人の学習者からこんな話を聞きました。日本人のママ友に「今日カラオケ行かない?」と誘ったら「今日はちょっと…」と返され、「ちょっとって、行くの? 行かないの?」と詰め寄ってしまったという話でした。日本語は曖昧でハイコンテクストな言語で理解するのも教えるのも大変です。日本人が言う「ちょっと…」は「行かない」で、「行けたら行く」は「行く可能性が低い」なんてことは授業では教えません。今後も日本語の語彙や文法を教えるだけでなく、日本社会の中でお互いが心地よく暮らしていけるような活動をしていきたいなと思っています。

最後に、私が文窓会に入るきっかけとなったのは、KOJSP(神戸オックスフォード日本学プログラム)の修了式に参加したことでした。この修了式に誘ってくれたのは、タッチフットボール部で同期だった経済学部卒業生の友人です。彼女が「神戸大学人の集い」に参加した際に武藤会長と繋がり、そこから私にも声をかけてくれたのです。文学部卒業生の私は、恥ずかしながら KOJSP というプロジェクトが文学部で行われていることをまったく知りませんでした。その時その時で興味を持ったことを選んで何の脈絡もないように進んできましたが、その時その時に出会った人たちは今も関係が続いています。その人たちとの繋がりが新たな繋がりを生み、その繋がりを辿っていった先が今の私の現在地だと思います。そう思うと、私が文窓会の一員になったことも不思議ではない気がしました。

憎めない国、フランス流

アール ドゥ ヴィーヴル
ART DE VIVRE

木村 薫(フランス文学専修・2017年卒、
2021年博士課程前期課程修了)

「多少の年次の遅れなど気にせずに挑戦したらいい」。

学部時代、大人に映っていた仏文の先輩が、そう、エールを送ってくださいました。その言葉に背中を押され、大学院でフランス留学を決意。ゆったりとした時間の流れるパリ生活をすっかり気に入ってしまい、そのまま1年どころか5年にわたって勉学と就労で居座りつづけ、言語とフランス的感性を磨きました。

今は、そのおかげもあり在日フランス大使館の貿易投資庁—ビジネスフランスに勤めています。パリに本部を構える貿易投資推進の使命を担う仏公的機関ビジネスフランスの日本事務所で、館内公用語は仏語。東京にありながら、果てしなくフランス的な環境で日仏間を取りもつお仕事です。

ざっくりとした私の担当は、

1. 仏企業の日本進出支援。所属はアール ドゥ ヴィーヴル ART DE VIVRE (フレンチライフスタイル部門)。主たる担当はインテリアのクラフトで、EPV(無形文化遺産企業)と呼ばれる職人技に優れたブランドの市場調査やパートナー企業探しなど日本進出支援をしています。
2. 日本人では唯一、大阪万博関連プロジェクト担当も兼任しており、テクノロジー、ライフスタイル、ヘルスケア、食品部門など様々なセクターの企業団、仏地域圏代表団の来日時のアテンドやBtoB イベント企画・運営を行っています。
3. 新規事業開拓担当でもあり、既存のECプラットフォームに仏ブランドを登録するプロジェクト立ち上げの真最中です。

寛大なお国柄のためか、現地職員といえど一人に与えられる裁量は大きく、着任二年目にして仏政府依頼の1000万円相当の市場調査の案件を担当したり、万博プロジェクトチームで0から企画・実行したり、構想実現に向けて日々奔走しています。

2024年パリオリンピックが記憶に新しい、なにかと物議を醸しがちなフランス。今年の万博でも開幕1週間前の事前視察に何うと、案の定まだまだ絶賛工事の様相。フランス館内のエスカレー

ターも調整中で動いておらず、工事現場のガガガガーいう落ち着きのなさが館内に響き渡る始末。1週間前だというのにひやひやしながら、開幕当日。直前の追い込み力が凄まじく、なんとか間に合っていました。臨機応変で

楽観的、準備が多少甘くても本番に強く、土壇場でなんとかこなしてしまう天晴れな国!(あるいは、少なくとも本人たちの間ではうまくいったことになっている…)周到に詰めて詰めてつめて準備をする日本人としては、心を揺さぶられ振り回される部分も大いにありますが、フランス流にポジティブに仕事に励んではヴァカンスお休みもしっかりとって、人生を鷹揚に愉しんでいます。

1年後に自分がなにをしているのかさえ不透明な生活も、フランス的感性にかかれれば、なんとでもなろうと思えます。30歳を迎え、自ら肩身を狭めて自分らしさに蓋をするのをやめ、新しい環境では新しいことを、と今年からコンテンポラリーダンスに挑戦しています。ダンサーがもって生まれた身体を生かす、その人にしかできない踊り。鏡張りのスタジオで他人との比較の中で自らの醜さを見つめてきた子供時代のバレエとは打って変わって、内面をさらけ出し自己解放につながる動きです。体の先端に神経を行き届かせ、呼吸と音楽と溶け合って体に語らせる面白さに浸っています。その時々踊り手や空間、湿度温度といった、その場の空気感に応じた振り付けをしてくださる芸術性溢れる先生にも恵まれ、表現の喜びを噛み締める日々です。

「心の赴くままに、未知との遭遇を愉しむこと」—それこそが、フランス文学・文化を通して私が学んだ柔軟で懐の深いフランス流の暮らし。いつの間にか先輩のエールからは想像もつかないようなところへ漕ぎ出してしまいましたが、未来に何の定めがなくとも人生のベクトルを失わずにいられる、とっておきの薫陶を受けました。神戸大学志望のきっかけとなった美術史の宮下先生、仏文ゼミの敬愛する松田先生と中畑先生、個性豊かな先輩、同期、後輩たち。あたたかく見守り続けてくださる同窓生、文窓のみなさま、神戸大学文学部でのご縁なくしては今の私はありえません。心から感謝しております。



© Megumi Chikada

人生の転機と 「考える力」の大切さ

DR. THIN AYE AYE KO

(ティン エイ エイ コ) (文化構造論専攻・2003年卒)

私にとって人生のターニングポイントとなったのは、1994年に神戸大学に研究生として入学できたことでした。そこでの西光義弘先生との出会いが、私に研究の楽しさを教えてくれました。そして、研究の成果がどのように社会に应用されるのかを体感することができました。

つまり、1994年から2005年までの11年間にわたる神戸大学での学生生活、そして助手としての仕事経験が、私の人生観を大きく変えたのです。

私の博士論文では、比較言語学の中でも認知意味論を用いて、語彙の意味の関連性を明らかにすることに取り組みました。毎日、多くの語彙を分析・分類し、その結果を先生に報告するのが日課でした。先生から紹介された参考書はどれも、私の思考を深めてくれる貴重なものばかりでした。中には古書も多くありましたが、現代の研究にも通用する内容が含まれており、先生は古本屋で見つけた関連書籍を頻繁に買ってきてくださいました。その嬉しそうな先生の表情は、今でも鮮明に覚えています。

「これはなかなか手に入らない本だよ。自分の考えとこの本の内容が合っているか、違うならどこがどう違うのかを考えてみてほしい」と、先生は私に語りかけました。

当時の私は、「考える力」が教育においてどれほど重要かを理解していませんでした。今となっては、先生の偉大さを深く実感しています。ミャンマーから日本へ行く機会があるたびに、必ず先生と神戸大学の「瀧川会館」でお会いし、コーヒーを飲みながら研究の話に花を咲かせました。2019年7月に先生は73歳で永眠され、それから6年が経ちました。もうお会いできないのだと思うと、今でも悲しみが込み上げてきます。

研究発表では議論が苦手だった私は、いつも先生に「語彙をまとめて辞書を作りたい」と夢を語っていました。卒業後は研究者の道を選ばず、帰国して日本語教材の作成に専念しました。私の夢であった『ミャンマー語表記一漢字辞書』は、その10年後に完成しました。携帯用の『ミヤ

ンマー語表記一語彙辞書』も学習者の間で大変人気となり、ベストセラーになりました。

この辞書が好評を得た理由は、名詞・動詞・形容詞を分け、日本語能力試験の内容に適した語彙を厳選して収録した点にあります。試験対策に適した構成でありながら、「誰のために何をするのか」という視点に立った研究者としてのこだわりが詰まっていました。

ミャンマーの若者たちにも「考える力」を養ってほしいと日々努力していますが、現状はまだ厳しいものがあります。その背景には、ミャンマーの学校教育制度がありました。暗記中心の教育のため、学生たちは自分で考える力が育ちにくい状況にあります。「内容の理解力」や「独創性」を育てるには、大きな壁が存在しています。

たとえば、日本の企業の面接対策においても、自分の意見を述べるのではなく、あらかじめ用意された文章を暗記して話すケースが多く見られます。添削しても、実際の面接では暗記した内容をそのまま話す傾向があり、企業からは「個性が分からない」との指摘を受けることがよくあります。

私にできることは、教材を通じて学習者に影響を与えることです。たとえば、「面接対策」の教材を作る際には、例文を並べるのではなく、準備の手順から始め、「どのように考えて文を作るか」「自分らしさや説得力のある文章とは何か」に重点を置いた構成にしています。

これまでに22種類の教材を出版することができましたが、今後は「考える力の重要性」をわかりやすく解説した本を、ミャンマーの学生向けに執筆したいと考えています。

神戸大学での11年間で培った「考える力」をミャンマーの教育にどう生かすか。それは私一人の力では限界があり、国としての方針転換、すなわち抜本的な改革が必要であることは言うまでもありません。

+ ヒトコト : 比較言語学。現在、神戸でミャンマー人の人材派遣会社を経営されています。



「文青」の神戸

謝 格菲(シャ カクヒ)

(神戸大学大学院 人文学研究科
文化構造専攻 中国・韓国文学研究室)

「文青」とは、中国語「文芸青年」の略称であり、文芸が全般的に好きな人間を指す。1950年代には、中国大陆と台湾で「文芸青年」という言い方がすでに存在していた。そして、「文青」という略称が「小資（プチブル）」の美学が中国を席巻した2010年前後にインターネットで流行っていた。具体的に言うと、文青たちはミラン・クンデラと村上春樹の小説を読んで、ウディ・アレン、ウォン・カーウァイと岩井俊二の映画を観て、美術館と古本屋の常連である。例えば、『花束みたいな恋をした』の主人公は文青の典型だ。

最初に、この言葉はポジティブな意味だったが、今では皮肉や自嘲に近い。経済不況の現在では、文芸作品に没頭し、現実離れした生活を送る文青たちは大人らしくないと批判すべき、金儲けのために仕事するのが唯一の正道だと思われる。仕事とは、自分の時間や知恵を「輸出」し、労働市場で金銭と交換する行為であると言える。しかし、人間は「輸入」も必要であり、すなわち労働力の再生産が不可欠である。飲食や睡眠は身体的な再生産であり、文学や芸術は精神的な再生産である。したがって、文芸活動もまた、人間の生活において欠かすことのできない要素だ！

私は中学生の頃からこのプチブルの風潮の影響を受けて、今も自ら「文青」だと思う。それでは、「文青」の端くれの私から、神戸の気に入った場所を紹介させていただきます。

まずは映画館。中国ではほとんどシネコンであるが、日本では大手のシネコン以外、独立して運営しているミニシアターや名画座も多い。この点はとても羨ましい。神戸で、私が一番好きな映画館は新開地のパルシネマである。新開地は、昔には映画館や劇場が櫛比して、「東の浅草、西の新開地」と並列された繁栄街であった。私は朝パルを見に行く途中で、新開地商店街のパチンコ店の前に並ぶ列の長さにより、時間を判断できる。もし列がまだ短ければ、映画の開演まで少し時間があるということだ。逆に、列が長ければ、映画館まで走らなければならない。「朝パル」のおかげで、チャップリンの映画を数多く観た。

もう一つの有名な独立映画館は元町映画館である。小規模だが、監督や俳優の舞台挨拶がよくある。さらに、TOHO系の「午前10時の映画祭」もお勧めです。この企画は10年以上運営され、毎年映画評論家が名作映画20本以上を選んで、午前10時から上映される。兵庫県内では、TOHOシネマズ西宮 OSとOSシネマズ神戸ハーバーランドの2つの映画館が参加している。一番印象に

残ったのは、友達と一緒に『無法松の一生』（1958年版）を鑑賞したことだ。

次は古本屋についてお話ししましょう。神大の皆さんは、六甲の「口笛文庫」が馴染みだろう。六甲道に住んでいた頃によく訪れ、三宮駅前に姉妹店もある。素朴な三宮店に比べると、六甲店は入ると「住居侵入」のような気分になる。店内に真ん中のテーブルには、整理されていない大量の古書が不安定に積み上げられており、来場者は頭を傾けて背表紙のタイトルを見つめながら、誤って何かを倒さないようにバッグを心して持ち歩く。店主は古本の山に囲まれた薄暗い隅に座って、顔をはっきりと見ることはできなかった。どういうわけか、私の頭の中にある彼の印象は、いつもヴィンテージのウールのベストを着て、ふわふわのパーマヘアの高橋一生のような男性である。

さて、元町へ足を運ぼう。元町には数多くの古本屋が集まっている。中国からの先生や学生が神戸での学会に参加するたびに、元町の古本屋に立ち寄りにしている。

その中で、最も有名な一軒は「1003」だろうか。私は一時に森茉莉のエッセイに夢中になって、「1003」から『贅沢貧乏』と『記憶の繪』の初版本を手に入れた。実は購入後、ただ本棚に置いたまま、二度と開くことはない。読みたいなら、安価で持ち運びやすい文庫本を読んでいる。この本屋の良いところは、ZINE*を多数揃えていることと、時々イベントを開催することである。そして、栄町にあるミステリー専門の古本屋「うみねこ堂書店」もすすめたい。ここで偶然に、神戸出身の小説家・陳舜臣の『桃花流水』を購入した。これをきっかけに、博士の道を歩み始めた。

最後に、私は音楽にこだわりがあまりないが、ちょっとだけ話しましょう。日本に来て以来、私が特に興味深いと思うのは、ストリートピアノである。中国にもいくつかあるが、数が非常に少ないし、使えない場合も多い。日本では、ストリートピアノの利用率が高い。

旧居留地の三井住友銀行神戸営業部前にピアノが一台設置されている。去年の春、そこを通りかかったとき、偶然誰かが久石譲の曲を演奏していた。私が近くで聞いていると、時折桜の花びらが目の前をゆらゆら舞い落ちていた。なんとも感動させられた。

* ZINE（ジン）：自主的に発行する小冊子

+ ヒトコト：大学院生（中国文学の濱田先生の研究生）。陳舜臣を研究されています。



モジリアーニ

藤本 伸夫(芸術学専攻・1962年卒)

戦後15年ぐらいのことだった。文学部の第10期生だったわたしは、シニア過程で「哲学科・芸術学専攻」へ進んだ。必須科目はなく、好きな講義を選べばよかった。「西鶴・好色一代男」「芭蕉・奥の細道」「万葉集」「近代演劇の父・イブセン」など文学的なものを選んだ。中、高等学校の教科書に載っている「名画」に全く心が動かされず、ぼくには絵なんて分からない、という根強いコンプレックスがあったので、美術的な講義は避けた。

この専攻科の助手に成瀬さんという人がおられた。後に「大和文華館」に勤め同館次長になられたが、当時は「印象派」以降の西洋絵画を主に研究されていた。

ある時、二人だけになる機会があったので、わたしは長年の自分のコンプレックスを正直に告白した。すると、成瀬さんは即座に、「そろそだよ。教科書であんな悪い複製画を見せられたら、(なんや、名画やて、こんなくだらんもんか)と思うの、無理ないよ。あんなもの、載せんほうがましや」

それから「これ、見たら」と、読んでいたフランスの美術書をこちらに向けられた。きらきらと輝く美しい宝石のようなものがある。見てはいけないものを見てるようだ。モジリアーニの裸婦だった。(やっぱり名画といわれるものは、こんなにも素晴らしいのか)。心から感嘆した。

帰路、本屋に飛び込んだ。モジリアーニの画集を手にとった。だが、さきほどの感慨はみじんもなく、買うのをやめた。助手の人が言われたように、当時のわが国のカラー印刷のレベルは低かったのだろう。だがこの日以降、わたしは絵の展覧会をちょくちょく覗くようになった。

25歳のとき。正月に高校時代からの友人ふたりと倉敷へドライブ旅行をした。鷺羽山に上ってから、「大原美術館」に立ち寄った。そこで一枚のピカソの絵と出会う。「キュビズム時代」のもので、緑の色がとても印象的なその作品とわたしの眼の間にピーンと一本の糸が張られて、動けなくなった――。

「ええなあ」。わたしは感極まって、友人たち

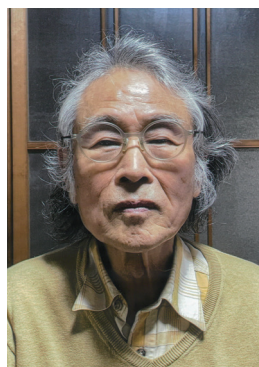
を振り返った。が、二人とも照れくさそうに視線をはずした。彼らには悪いが、(おれはピカソが解る何人かにひとりの人間かも知れんぞ)と思い、わたしの積年の絵画コンプレックスは氷解した。

この年には「東京オリンピック」が開催され、家電メーカーはこぞって「オリンピックをカラーで見よう」と連呼した。以後、日本のカラーテレビの技術も急速に進歩し、わたしはNHK・民放の美術番組を丹念に観るようになった。また展覧会場にも足しげく通うなどして、絵画鑑賞はわたしの大きな楽しみになり、人生を豊かにしてくれた。

わたしは木彫を生業にしている。モジリアーニに感動したあの日から、さまざまな美術作品に触れてきて、自然に父の仕事であった「木彫」にも興味をもつようになり、その跡を継ぐことになった。わたしが彫った額縁に、妻はモジリアーニの複製画を入れて玄関に飾った。例の首が長くて瞳を入れない少女像だ。わたしは見るたびに(やっぱりモジリアーニはええなあ)と眺めている。

わたしはこの秋には八十代後半になる。あとそんなに長くは生きられないだろう。だから、わたしの絵画鑑賞はモジリアーニに始まり、モジリアーニに終わる、といえそうである。

+ ヒトコト : とある文章関係の集いで偶然お会いして、芸術学専攻の言葉で同窓生と知りました。戦後80年の“証言”として寄稿をお願いした次第です。(タナカ)



〔シリーズご寄稿・第8回〕

「残るのは温かな繋がり」

赤羽 佳奈子

信濃毎日新聞株式会社 松本本社
(国文学専修・2017年度卒)

1995年という、皆さんは何を思い浮かべるだろうか。神戸に縁のある方々なら、阪神淡路大震災を連想する方が多いのではないかなと思う。今年1月で震災から30年。この年は私の生まれた年でもあり、これまで何度も「震災の年の生まれ」であることを意識する機会があった。30年を機に大学生活を過ごした地で起きた震災のことを考えたいと思い、少し遅れた2月に神戸に出向いた。



訪れたのは長田区の真陽小学校。長野県松本市の音楽家狭間壮さん(82)が震災後に交流をしていたと聞き、当時の校長だった丸山喜久子先生(88)をご紹介いただいて会うことになった。

狭間さんと真陽小との交流は、震災前に狭間さんが仲間と出版したエッセー集をきっかけに始まった。このエッセー集は、全国から寄せられた思い出の1曲と曲にまつわるエピソードをまとめたものだ。狭間さんは、ある女性が震災直後に瓦礫の中で歌うことで救助を待つ人を勇気づけようとしたという話を知り、避難所になっていた神戸市内の小中学校50校にエッセー集を贈った。後に丸山先生がお礼の手紙を書き、狭間さんが真陽小にコンサートに出向いたり、信州のリングを贈ったりする交流が続いたという。

狭間さんが訪れた際、1年生の女の子が立候補してピアノを弾き、その児童が卒業後も狭間さんに手紙を書いていたこと、子どもや地域の方が狭間さんのリングを喜んでいたり…。震災で大変な経験をしたにもかかわらず、交流を思い出す丸山先生は優しい笑顔だった。狭間さんも、95年11月に初めて音楽仲間と訪れた際、3階から子どもたちが手を振って大歓迎してくれたことが心に残っていると手紙に綴ってくれたという。「震災で失くしたのもつらいこともいっぱいあるけれど、その中で残っていくもの

は、温かい人との繋がりや優しくしていただいたことへの感謝なんじゃないかな」と丸山先生。その言葉にすべてが込められている気がした。

現校長の丸山知格先生(58)が、当時の記録や交流の感想を記した子どもの作文を探してくださった。偶然にも知格先生は長野県の出身。後に長野県を訪れた際、体調の関係で狭間さんには会えなかったものの、妻のゆかさんと会う場面に同席させていただいた。狭間さんと真陽の方々との縁が30年後、知格先生と繋がった。知格先生は震災の記憶を若い先生や子どもたちに伝えようと折に触れて話をしており、きっとこの交流がまた新たな出会いに結びつくのだろうと思っている。

今年6月には、阪神淡路大震災を機に活動を始めた「松本市炊き出し隊みらい」取材した。松本市でレストランを経営する浅田修吉さん(67)を中心とした団体で、震災以降、全国各地の被災地に炊き出しに出向いた回数は400回を超える。今回は能登半島地震の炊き出しでできた縁を契機に石川県立看護大学の講義に招かれ、被災地での活動について学生に語る様子取材した。

災害を通じた生と死をテーマに学ぶ1年生が中心の講座で、浅田さんは炊き出しの際の心構えなどを説明した。学生の質問に答えながら、炊き出しに行っても歓迎されるとは限らない現実や、遺体袋が並ぶ場所の近くなど厳しい環境の中で活動したことも語った。それでも「飲食店をやっている者として、食で元気になってもらえれば本望。こうして若い人たちが興味を持って聞いてくれるのがうれしい」と伝える浅田さんの姿には強い思いを感じた。熱心に耳を傾ける学生たちの表情も印象的で、きっと数年後に看護の世界で多くの人を救うであろう姿がまぶしく映った。

私が初めて災害取材をしたのは、2019年の台風19号だった。被災者にカメラを向けることには葛藤もあり、心に寄り添う報道の在り方はまだ分からない。ただ、被災地の状況を知らせることで支援に繋がったり、記録を残したりする仕事は必要だと思っている。もちろん起こらないことが一番だが、これまでの災害の中で生まれた温かい人々の繋がりが、これから起こる災害の被害を減らし、新たな支援の輪に繋がってほしい。30年を機にした取材を通じ、自分に何ができるのか改めて考えている。

2024年度 卒業生を送り、

3月25日 2024年度 卒業・修了祝賀会
(LANS BOX 2Fホール)

2024年3月末に5年ぶりにようやく再開した卒業・修了祝賀会。続く2024年度も、2025年3月25日無事に開催することができました。本祝賀会は、白鳥文学部長、武藤文窓会会長のお祝いの言葉に始まり、卒業生・修了生各位は飲食を楽しみながら（今回も、午前中はポートアイランドで卒業・修了式、それから休む間もなく午後は文学部各専修での学位記授与式と、空腹も一段のことだったと思います）、馴染みどうし話に花を咲かせておりました。そして同じく昨年度再開した抽選会。景品担当からするとネタ切れが怖いのですが……今回も好評でした。受賞に合わせて一言を寄せてくれた卒業生・修了生たちの声も、とても良かったです。



ということで、新型コロナでひとたび途絶えてしまった卒業生祝賀会でしたが、関係各位のご尽力のおかげで、こうして

ふたたび軌道に乗せることができました。惜しむらくは、卒業生・修了生全体で見ると、参加されていない方の数がまだまだ少くないので、卒業生・修了生みなさまへの事前の周知と、各専修の先生方へのご協力のお願い、そして開始時間等の調整は、今後もひきつづき工夫できればと思っています。



2024年度卒業生アンケート

あなたが神戸大学文学部での学びで得た『最大のもの』は何でしょう？

* ()は専修、卒論：は卒論のテーマ

- SNS との向き合い方。世界や日本が大きくゆらぐ中で SNS とどのように付き合っていくのかを改めて考えさせられることが多かった。そうした中で文章をどのように読み解くかの力がためされた。本当にそうなのかといったファクトチェックから、書き手のポジションを考えた上でこの文はどう読み取るべきか等、文と向き合う、その力を神大文学部の学びで得られた。(国文学 / 卒論：お伽草子「和泉式部」)
- いろいろな価値観を尊重しつつ、周囲に過度に流されることなく、自分自身の意見をしっかり持つことの大切さを学びました。(心理学 / 卒論：道徳的幸運と不誠実な行動の関連)
- 世界が大きく揺れている現在、政治家、個人、利益団体が自分の利益で、一般の民衆を騙して、フェイクニュースが世の中であふれています。こんな世の中で、自己思考を持つことはすごく重要ではないかと強く感じます。二年間の研究を通して、資料を収集&分析する能力や自分から独自の論点を生み出して、論証する能力がすごく進歩を取りました。今後揺れ続いていく社会では、自己思考を持ち、行動していくと思います。(文化構造 / 卒論：日本語学から台湾語仮名の考察 — 2 モーラ表記を中心—)
- 書くことの不自由さ。書かれたものの存在の力強さ。言語の力のおそろしさ。(フランス文学 / 卒論：エリック・サティ研究)
- 自ら考え、相談し、行動することの大切さ。待っていても何も起こらないし、変わらないので、自分の気持ちや考えを意識しながら、これからも行動に移していけたらと思います。お世話になりました。(ドイツ文学 / 卒論：『ブランビラ王女』における〈衣装〉と自己)
- 自分の興味です。大学での学びを通して、人の感情や思いに対する興味が明確になりました。私はもともと漠然と心理学について学びたいと考えていましたが人数の関係で国文学に入ることになりました。国文学では自分のやりたい人間の心理などはできないと思いましたが、自分のやりたいことを先生に伝えると様々なことを先生に提案していただけて最終的に和歌を通して自分の興味を追求することができたと感じています。(国文学 / 卒論：『時代不同歌合』の配列に関する一考察)
- 以前理解できなかった人間の“悪意”を理解できるようになりました。一見非常に矛盾する表象あるいは人の行動の裏には、その合理性が存在する。以前は自分の組織で“怪しい”ことをする人は変なやつだと思いましたが、だんだん、なぜその人はそういうことをするのか、を考えるようになりました。ものごとや周りのできごとを理解できるようになった。それはすごく大事だと思います。それも神戸大学で一番学び？ きたこと、神戸大学に来てうれしいです。これからもひき続き“生き方”を探求していきます。(社会動態 / 卒論：中国農村部における世代間関係)

2025年度 新入生を迎えました。

4月9日 2025年度 新入生歓迎会 (文学部ロビー)

そして、学内外の行事で目白押しの年度末から年度初め。文窓会としてもほとんど休む間もなく、明るく4月9日には2025年度の新入生歓迎会を開催いたしました。こちらは一昨年前の再開から以前と同様に実施できており、100余名の新入生のほとんど、全専修の教員、上級生や大学院生らが参加いたしました(事前連絡の不首尾により、留学生担当教員や留学生らに参加してもらえなかったのは誠に残念でした…次回への反省点です)。



その新入生歓迎会は、武藤文窓会会長による挨拶と、役員紹介ならびに活動紹介のあと、白鳥文学部長にバトンタッチされ、各専修教員による自己紹介を経て、しばしお茶とお菓子をいただきながらの歓談となりました(午後の授

業後でちょうどお腹の空く時間帯の新入生たち、今回もお菓子によく手が進んでおりました)。それから各専修のブースに分かれて、教員や上級生、大学院生たちによる専修紹介を、新入生たちはいくつも回って熱心に聞き入っていました。



なお、『文窓』本号でも前号に続き、新入生歓迎会と卒業・修了祝賀会で配布したアンケートより、新入生と卒業生による回答の一部を紹介しています。入学直後の熱気や卒業・修了までの成長の一端を示すものとして、ぜひご一読ください。

最後に、卒業・修了祝賀会と新入生歓迎会の開催、会場の設営等にあたっては、文学部前学生委員の梶尾先生と現学生委員の奥村先生にご尽力いただきました。ここに記して感謝申し上げます。ありがとうございました。

(両日司会：梅村麦生)

2025年度新入生アンケート

入学式記念講演～直木賞受賞作家・伊与原新(理学部卒)の感想

●志入試の集まりの帰りにたまたま手に取った本が『藍を継ぐ海』でした。直木賞、芥川賞などの賞を取ったかどうかは私が本を選ぶ基準にはなっておりませんので、本当に私の直観で選んだ本です。講演者を知ったときは本当に驚きました。講演は、文学者としてというより、人生の先輩として私たちに語りかけるもので、効率や近道をまず考えてしまう私にはとても刺さるものでした。

●入学式の記念講演は伊与原さんのお話がきけて人生には色々な方法があるのだなと思いました。特に定時制高校の人達が科学のコンテストに出て活躍されている話を聞いて様々な生活背景を背負った人が自分の強みを生かして開発やプレゼンを行っていることに強く感動しました。自分も一つの道にこだわりすぎることなくそこから新たな道にすすむことも恐れないでいきたいと思いました。

●異色の経歴を持つ方の人生を知ることができたのは面白かったです。神戸大学を卒業した方が自ら将来を選択し、実際に活躍していることを感じられて嬉しく思いました。まだ自分の人生が決まったわけではない、いろいろなことに挑戦していけばよい、と思えるようになり、大学生活への希望になりました。

●「一番の近道は遠回りだった。遠回りこそが俺の最短の道だった。」ジャイロツェペリ名言を中心に展開された先日の講演は、私に深い感銘を与えた。自分自身ジョジョという作品が好きで、勿論この名言も知ってはいたが、その深い意味までは考えてこなかった。しかし今回、その発言の真意、さらには大学における「学びの遠回り」の必要性についても学ぶことができ、これから大学での学びを始める私にとって、とてもいい機会となった。

大学生として何を学び、何をやってみたいと考えている？

●文学部という広いジャンルをカバーする学部所属したからには、まだ知らない領域のことについて学びたい。美術史や哲学など、高校で深掘ることのなかったことに熱を注ぎたい。海外にも行って、見たことのないものを見たい。

●大学生になって今までどうしても受験がのしかかってきていた学習が自分の興味のあることについてつき詰めて学べるということに大きな期待を抱いており、一回生のうちは様々な学問に触れ合うことで自らの可能性を狭めることなく挑戦していきたいと考えています。入学前は心理学をやったかったのでそこに焦点をあてながら幅広く取組みたいです。学習以外にもサークルやバイトも参加して沢山のひとと触れ合って価値観を深めていきたいと思っています。

●国文学を学ぶ中で、昔の人の見ていた世界を知りたいです。それを社会に役立てようという考えはまだありませんが、その

知識が思いもよらないところで何かの役に立てばいいなと思います。

●私だけのときめきを追及したいです。昔から、辛いときはひたすらにその先だけをにぎりしめて生きてきました。大学ではもっとその先に近づきたい、それだけのために命をついやして私のなかに入れて、自信を持って自分のために生きられるようになりたいと思います。

●主には卒業するため、教職の免許を取るために大学に通おうと考えていました。しかし、新歓祭で「救援隊」のことを知り、ボランティアをすることができるとわかり、とても心ひかれしました。人に何かを伝えるとき、説得力を持つ1つの要因は言葉の裏にある多くの経験だと考えています。ボランティアを通して、人生の喜び、傷などを様々な人とわかちあいたいです。

神戸オックスフォード日本学プログラム KOJSP 第12期生修了発表会報告

2024年8月2日(金)、神戸オックスフォード日本学プログラム12期生の修了発表会、修了式、修了パーティーが行われました。発表会では、8名の修了生たちが日本のさまざまな側面に焦点を当ててリサーチし、思考を重ねた研究成果の発表がありました。

修了生8名による、次の発表の題目だけを見ても、幅広い日本学と言えるのではないでしょう。

1.「二十世紀日本におけるユダヤ人陰謀説：その政治的影響」 2.「どうやって母親の生活水準を改善するのか」 3.「暴力団組織と日本社会における役割」 4.「日本における報道の自由と名誉棄損：旧統一教会に関する事例研究」 5.「封建主義から資本主義への移行：英国と日本の比較分析」 6.「90年代以降日本不動産市場の回復と今後の展望」 7.「1970年の日本万国博覧会：日本の国家的アイデンティティの反映と再定義」 8.「日本の防衛の将来はどうか」

一般聴衆としては、「暴力団組織と日本社会における役割」というテーマはかなり特異な発表に思えました。暴力団組織が少し肯定的に捉



えられているのだな…と彼女、彼たちから見た視点での興味深いスピーチを聴くことができました。

また、KOJSP 生たちの大学の外での様々な活動も知りました。島津製作所とのプロジェクトでは、工場見学、食堂での昼食、文化財修復、経営哲学の学習等を体験したそうです。他にもホームステイ先に滞在したり、山本能楽堂主催のイベントに参加して英語広報誌作成に携わったりと、多くの経験をしたということです。

発表会後は、修了式、修了パーティーが開催されました。

パーティーの前には、神戸大学応援団から修了生へのエールを送るパフォーマンスがあり、瀧川記念学術交流会館は KOJSP 一色の暑い！暑い！夏の日でした。



(報告 中川 伸子)



関係者の皆様、お疲れ様でした。今年8月には13期生が修了式を終え、来たる10月には新たな KOJSP14期生をキャンパスに迎えます。どんな体験や出会い、感動があるか、楽しみです。

文窓会（文学部同窓会）—— 会計報告 ——

令和6年度収支計算書（令和6年4月1日～令和7年3月31日）

令和6年度 令和5年度(参考)

【収入の部】			
収入合計		¥5,111,975	¥1,419,938
	会費納入金	4,400,000	520,000
	協力金	669,000	831,000
	雑収入	42,975	68,938

【支出の部】			
支出合計		¥3,698,993	¥3,861,117
事業活動費		¥2,709,212	¥2,805,258
	会報費	1,400,418	1,504,933
	歓送迎会費	509,014	648,858
	文窓賞費	368,365	221,860
	ホームページ管理費	8,250	8,250
	総会費	307,165	305,357
	活動援助費	50,000	50,000
	名簿管理費	66,000	66,000
協力金費		¥110,000	¥130,000
	学術助成費	110,000	130,000
事務局費		¥607,302	¥605,619
	事務業務委託報酬	322,800	325,200
	家賃・水道光熱費	113,463	114,406
	通信費	62,115	54,158
	旅費交通費	76,770	82,130
	消耗品費	32,154	29,725
支払手数料(振込・振替料金)		¥27,791	¥33,100
会議費		¥107,000	¥103,000
渉外費		¥137,688	¥167,640
慶弔費		¥0	¥16,500

差引収支		¥1,412,982	(-) ¥2,441,179
------	--	------------	----------------

前年度繰越金		¥18,310,995	¥20,752,174
差引収支		¥1,412,982	(-) ¥2,441,179
次年度繰越金		¥19,723,977	¥18,310,995

令和6年度財産目録（令和7年3月31日現在）

Ⅰ．資産の部		¥19,723,977
	現金	44,854
	(ゆうちょ銀行) 普通貯金	1,045,475
	(みなと銀行) 普通預金	9,525
	(ゆうちょ銀行) 振替口座	2,035,807
	(ゆうちょ銀行) 定額貯金	6,003,826
	(みなと銀行) 定期預金	1,007,210
	(みなと銀行) 定期預金	1,510,308
	(みなと銀行) 定期預金	8,066,972
Ⅱ．負債の部		¥0
Ⅲ．正味財産合計		¥19,723,977

(注) 令和5年度までは、新入学生の会費納入金は徴収月である3月に計上していましたが、令和6年4月入学生から徴収方法の変更により4月以降の計上となります。

事業年度に係る決算報告書を監査した結果、
適正であることを認めます。

令和7年6月11日

会計監査 三宅 征彦 印

会計監査 中畑 寛之 印

文窓会役員（2025年9月末現在）

会長	武藤美也子	1968年卒・国文学
副会長	吉田 浩次	1968年卒・社会学
副会長	西川 京子	1969年卒・西洋史学
幹事長	廣野 幸夫	1968年卒・社会学
常任幹事	日高 健一	1961年卒・芸術学
常任幹事	田中 睦子	1971年卒・芸術学
常任幹事	市澤 哲	1983年卒・国史学
常任幹事	中川 伸子	1992年卒・哲学
常任幹事	成田 千紘	2007年卒・言語学
常任幹事	梅村 麦生	2009年卒・社会学
常任幹事	津田 薫	2010年卒・フランス文学
会計監査	三宅 征彦	1966年卒・社会学
会計監査	中畑 寛之	2001年修・フランス文学
東京支部長	田中 勉	1972年卒・国文学
東京支部 顧問	中野 裕	1961年卒・英米文学

文窓会東京支部だより

1 文窓会東京の総会：

今年の開催は取りやめとし、来年の開催を予定しています。

2 木曜会：

開催日時 7月10日（木）15時から17時

演 題：「平安朝の文学」

講演骨子：「平安朝の文学、源氏物語を中心として、源氏物語に代表される女性文学者の登場、日々の生活の情景、宮廷を中心とした男女関係など」

講 師：津島昭宏先生

講師略歴：國學院大學栃木短期大学教授

場 所：神戸大学六甲クラブ（有楽町電気ビル南館地下1階）Tel: 03-3211-2916

（神戸大学六甲クラブの場所は、日比谷帝国劇場ビルの建て替えにより、従来の日比谷帝国劇場ビル地下から、上記の有楽町電気ビルに移りました。）

表紙の「懐かしい通学路」の写真は、文窓会事務局の山本陽子さんが撮影、
裏表紙の「ある日のホームカミングデイ」風景写真は、常任幹事の津田 薫さんが撮影されたものです。



2025年10月25日(土)

神戸大学 ホームカミングデイ

第19回 10/25 土

神戸大学
ホームカミングデイ 2025

10:20 ~ 記念式典
於: 出光佐三記念六甲台講堂 (登録有形文化財)
YouTube にてライブ配信

※詳しくは下記のホームページをご覧ください。

第19回神戸大学ホームカミングデイ 検索



文学部ホームカミングデイ 2025

午後から!
誘い合わせて!

13:00~13:30

受付 文学部A棟1階エントランスホール
会場:文学部B棟132教室

13:30~13:40

開会挨拶、文学部長挨拶

13:40~14:30

卒業生による講演
[講演①]「古代の文書行政を支えた人—
地域社会の人的構成—」
(島根県立古代出雲歴史博物館学芸員
田中 昇一 氏
2024年博士課程後期課程修了)

14:30~15:20

[講演②]「入国審査官の仕事 —多様な現
場と役割—」
(名古屋出入国在留管理局職員
佐藤 瑞恵 氏
2017年博士課程前期課程修了)

休憩

15:30~16:00

第19回文窓賞授賞式及び受賞者スピーチ

16:00~16:20

文窓会総会

16:30~18:00

懇親会 瀧川記念学術交流会館
誘い合って1人でも多くの方に
ご参加いただきやすくしました

参加費
無料!

お帰りなさい、六甲台へ!

懇親会はゴージャスな夕映えに包まれて



<併設企画>

12:50 ~ 16:00

文学部A棟1階エントランスホール

展示: 教育研究プロジェクトの活動記録など

■お問い合わせ先

人文学研究科総務係

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1

Tel: 078-803-5591



文窓会 (文学部同窓会) ホームページ
<https://www.bunsokai.com>

*第19回文窓賞(学生レポートコンテスト) 入賞者の作品は、ホームページ「文窓」でお読みいただけます。